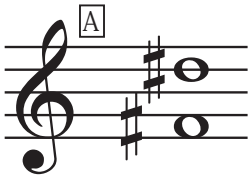
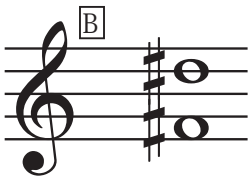


# 臨時記号の手入れ

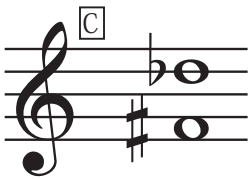
和音等に付けられた2つの臨時記号の縦位置が接近した時は、下にある臨時記号を左に移動させるのが楽譜浄書の原則です。六度音程と七度音程の間がその境界線で、七度音程以上になると縦に整列させることが出来ます。譜例 [A] では下声音に付くシャープが左に動かされています。これは Finale の初期設定によるもので、本例では特に手動調整を施す必要はないでしょう。ファイル別オプションの「臨時記号」に有る「和音に付く臨時記号同士の間隔」が動かす度合いを決定し、「垂直方向の衝突を回避する音程 (ステップ単位)」がこの回避操作実行の有無を決定しています。



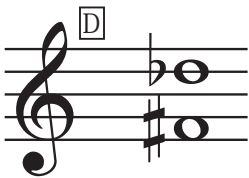
ここで「垂直方向の衝突を回避する音程 (ステップ単位)」に5以下の数値を入れてみると、譜例 [B] のように2つのシャープが縦に整列します。シャープ記号の左右の縦線が接触して一本の棒のようになりますので、これは良くない姿です。この数値はやはり6であるべきですが、少し Finale に詳しい人なら、「何かおかしい」と思うはずです。「ステップ単位」と言うからには、六度音程を指示する数値は5でなければなりません。音程にはゼロの概念がなく、「ステップ単位」の「ゼロ」が音程に言う「一度」になるからです。これは Finale 日本語版の誤訳に起因するものです。この原語は、Minimum Vertical Spacing Between Accidentals (Measured in Steps) ですが、「臨時記号を垂直に配置する最少値 (ステップ単位)」と理解すべきで、つまり、音程のステップ換算置がここに入力された数値、及びそれ以上なら臨時記号を垂直に整列させ、それ未満の場合に衝突回避を実行するということです。



他の多くのアイテムと同じく臨時記号もまた、上質の楽譜を作る為には、Finale の自動編集に頼りきりには出来ません。この臨時記号の設定も非常に良く設計されたものですが、やはり不十分な面があります。例えば譜例 [C] のように上声音に付くのがシャープではなくフラットなら、事情が大きく異なってきます。記号のデザインが違うためですが、譜例 [A] と同じように衝突回避が為されると、臨時記号同士が少し離れ過ぎに見えてきます。これがフラットではなくダブル・シャープなら、もっと大きな間隔が出現してきます。記譜用フォント各種のデザインによっても多少は違いますが、シャープとナチュラルの縦線が特に大きめの回避操作を要求し、フラットとダブル・フラット、及びダブル・シャープはそうでもないと言えます。



この組み合わせなら六度音程といえども垂直整列すら可能で、譜例 [D] が実行例です。Finale の臨時記号設定には、今のところ記号別のオプションはありません。[A] と同じ設定なら必ず [C] が出てきます。この [D] は「工具箱」の「臨時記号調整」ツールを用いて手動調整したものです。これが良いのかどうかについては、楽譜浄書家や編集者によって見解が微妙に異なるようです。[C] はともかく、[D] は良くない。たとえ衝突がなくとも、下のシャープを少し左に動かした方が良いとする見解もあります。



譜例 [E] の上声と下声の音程は七度ですから、シャープ同士でも垂直整列が可能です。もちろん、この場合でも下のシャープを動かした方が良いとする見解にも一理あります。たとえ接触してなくても、縦線が近距離で整列した状態を嫌うということです。ただ、その感覚の持ち主でも、ここで下のシャープを左には動かさないでしょう。それでは符頭と離れ過ぎてしまうからです。E 音の符頭が二度音程の衝突回避のために左に動かされていて、そのために臨時記号も離れるしかありません。それを更に離すという選択はないと言えます。ともあれ、符頭の衝突回避も、それに伴う臨時記号の調整も Finale が自動的に実行しますから、デフォルトで譜例 [E] の状態になります。しかしそれは、残念ながら、あまり良くない形です。



ここは譜例 [F] の形を採りたいところです。「2つの臨時記号の調整では下の記号を左に動かす」という規則には違反しますが、この場合は容認されています。これを初期設定で実現しようとするとの多くの部分で不都合が生じますので、手動調整しかないということになりますが、この臨時記号の手入れも、浄書原則の知識と感覚なくしては高品位な楽譜は作れないということの証左の一つです。

